

# 中学生の仲間集団の排他性に関する研究

有 倉 巳 幸 \*

(2011年10月25日 受理)

## The Study of Peer Group Exclusivity in Junior High School Students

YUKURA Miyuki

キーワード：排他性規範、排他性欲求、中学生の仲間集団、適応感、いじめ

### 要約

本研究は、中学生の仲間集団にみられる排他性を、排他性欲求と排他性規範という2つの要因からとらえ、学級適応感、自身の所属する仲間集団への適応感（自集団適応感）だけでなく、集団内地位やいじめに関する認知に及ぼす影響を検討することを目的とした。方法としては、架空のシナリオを用いた実験を行った。排他性規範（高・低）×排他性欲求（高・低）からなるシナリオを読ませて、登場人物の立場に立って、学級適応感や自集団適応感を評価してもらった。また、客観的な立場に立って、集団内地位やいじめに関する質問に回答してもらった。その結果、排他性規範の高い集団は、低い集団よりも学級適応感が低いと評価され、集団内に地位の差が生じ、いじめが起りやすいと評価されていた。

---

\* 鹿児島大学教育学部 教授

### 【問題・目的】

本研究では、思春期前期の仲間集団の特徴である排他性に注目し、排他的な仲間集団への所属欲求および排他的な行動規範を、この発達段階の生徒がどのようにとらえているかを検討することを目的とする。

小学校高学年からの思春期前期は、自らの対人行動において準拠する対象が、親をはじめとした大人から同じ年齢を基本とした友人へと移行する。そのため、友人との価値観が一致しているか否かは、この年代の子どもにとって重要な問題である。従って、仲間集団との関わりにおいて、どのような行動をとればよいのかについて、子どもたちは神経をとがらせ、自分がその集団内のメンバーにどのように評価されているのか、不安を抱えていることも多い。

一方で、この思春期前期の仲間集団内の人間関係やコミュニケーションは、親や教師からは観察困難なので、一見すると仲良くしているように見えても、その中で不快な思いをしながら付き合っている児童・生徒が少なからずいることが指摘されている (c.f. 榎本, 1999)。

こうした仲間集団の特徴としては、チャムグループに代表されるように、同じ興味関心で結ばれる仲良しグループであり、互いの類似性を言葉で確かめ合い、仲間の中で通用する言葉を作り、通用しない者を疎外するといった点が指摘される (黒沢・有本・森, 2003)。

近年、この思春期における仲間集団に見られる特徴は、いじめ問題との関連性から、様々な視点から研究されてきている (e.g., 石田・小島, 2009; 黒川・吉田, 2006; 三島, 2004; 三島, 2008; 大嶽, 2004)。

このうち、大嶽 (2004) は、学校での生活をひとりぼっちで過ごすことは「変わった人」という他者からのネガティブな評価を受けることにより、不安を高めることを挙げ、そうした不安が生じる背景に「誰かと一緒にいなくてはいけない、ひとりではいけない」といった、共有された規範 (行動の望ましさ) が存在することを指摘し、尺度化を図った。

こうした仲間集団に関する最近の研究の中で、本研究が取り上げるのは、排他性という視点である。排他性とは、三島 (2004) によると、「自分の仲間であるかどうかによって相手に対する態度を変えたり、自分の仲間と活動することに比べ、仲間以外の児童と活動することを楽しくないと感じたりする程度の強さ」で表現される。三島は、この定義を踏まえて、小学生の仲間集団に関する排他性尺度を開発し、その後、この研究をもとに、「親和的・独占的かわり」因子と「排除的・固定的かわり」因子からなる仲間集団指向性尺度を開発した (三島, 2008)。

有倉・乾 (2007) は、三島 (2004) が取り上げた排他性を、個人の排他的な感情・欲求を反映したものにとらえ直し、「排他性欲求」と位置づけた。本研究で用いる排他性欲求とは、三島 (2004) の定義も踏まえ、自分の所属している仲間集団およびそのメンバーに対する概念であり、仲間集団やそのメンバーとの親密さを確認するために、第三者を排除して仲間集団内だけの活動および、特定のメンバーと一緒にいることを求める傾向と定義されよう。一方で、有倉・乾 (2007) は自分が所属する集団には、どのような排他的な性質が見られるのかを「所属集団の排

他の行動規範（以下、排他性規範）」と呼んだ。排他性規範は、自分の所属している仲間集団の行動についての規範である。自分が所属している仲間集団のメンバーがとるべき同一行動についての暗黙の規範のことであり、同一行動とは、同調行動や第三者を排除する行動から構成されるものと定義されよう。

有倉・乾（2007）は、これらの要因を得点により高低の2群に分け、学級適応感および所属集団の適応感に及ぼす影響を検討したところ、排他性規範の主効果が有意であり、排他性規範の高い群は低い群より、学級適応感が低いことが示された。また、交互作用傾向が見られ、排他性規範が高くかつ排他性欲求が低い児童・生徒の自集団への適応感が4群の中で最も低かった。

また、有倉（2011）は、対象を中学生・高校生に広げ、サンプルを増やし、学校種×性ごとに検討した。分析にあたっては、学級適応感および自集団適応感の相関が高いことから、一方の変数をコントロールした上で、排他性欲求、排他性規範、および両変数の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を用いた。その結果、中学生男子、高校生女子において、目的変数が自集団適応感の場合、交互作用項の回帰係数が有意であり、単純傾斜の検定を行ったところ、排他性規範が高い場合に排他性欲求の単純傾斜が有意であった。また、目的変数が学級適応感の場合、排他性規範の回帰係数が有意であり、排他性規範が高いほど学級適応感が低いという結果が得られた。これらの結果は、有倉・乾（2007）の知見と一致した。

しかし、中学生女子と高校生男子では、これらの結果が見られなかった。その理由としては、中学生女子は、これらのカテゴリの中で最も排他性規範や排他性欲求の平均値が高いこと、高校生男子は、学級適応感と自集団適応感の相関が高いことが考えられた。前者に関しては、女子の発達段階として、このような集団を形成することが一般的であることが影響した可能性が考えられる。また、後者に関しては、一方の適応感を統制しなかった場合、中学生男子や高校生女子と同様の結果が得られたことからこのような理由が成り立つと考えられる。

有倉・乾（2007）及び有倉（2011）の両研究に共通するのは、調査において実際の友人関係について、排他性欲求及び排他性規範を測定し、これらを独立変数と見なして、学級適応感や自身の所属している集団への適応感への影響を検討した点である。これらの研究では、排他性欲求と排他性規範の両測定間に中程度の相関が認められた。分析を行う際にその影響が十分に小さいことを考慮したが、同じ回答者に評価させているため、避けられない問題であろう。

そこで、本研究では、架空のシナリオを用いて、排他性欲求と排他性規範が適応感などに及ぼす影響を実験的に検討することを試みる。この場合、シナリオによって、実験操作がなされ、その状況に置かれた場合の回答者の反応を測定する。本研究においては、排他性欲求の高い／低い生徒と、排他性規範の高い／低い仲間集団をもとに4つのシナリオを作成し、登場人物になったつもりで、所属する集団への適応感や感情、および学級適応感を評価してもらう。シナリオ実験は、実在する状況ではないため、場面の想像しやすさに左右される問題が考えられる。しかし、実際の友人関係について調査し検討する際に生じる問題を克服できることから、これら二つのア

アプローチを用いることで、より精度の高い検討を行うことができるであろう。

本研究ではさらに、従属測度として、仲間集団やその行動に対する認知を用いる。シナリオを読んでみて、どのように考えたかを尋ねる形式で、具体的には、シナリオで設定された仲間集団内でいじめが起こる可能性や、他のメンバーとのつきあいやささ、集団内地位などの認知を測定する。これらの測定により、仲間集団の排他性が集団内のメンバーに及ぼす影響をさらに詳しく解明することができるであろう。

以上の点を踏まえて、本研究では、以下に挙げる仮説を設定した。

まず、有倉・乾（2007）及び有倉（2011）の結果からも明らかのように、仲間集団の排他性規範の高い状況は、低い状況より生徒の学級適応感を低いと評価する（仮説1）と考えられる。仲間集団がとる排他的な行動は、学級内の他の友人関係との関わりを弱め、そのことは学級適応感の低さに表れてくるであろう。

また、排他性欲求の高い生徒は、低い生徒よりも学級適応感を低く評価する（仮説2）と考えられる。学級内での仲間集団といった小さな集団を志向するということは、より大きな学級集団という関わりへの不安の現れとみることができよう。そこで、本研究では併せて登場人物の感情も評価してもらうことにした。

有倉・乾（2007）、有倉（2011）では、自分の所属する集団への適応感を測定していたが、本研究においては、登場人物になったつもりで、評価してもらった。これらの先行研究において、この自集団適応感については、排他性規範×排他性欲求の交互作用が見られたが、本研究でも同様の結果が見られるであろう。つまり、排他性規範の高い集団に所属している場合に、排他性欲求の低い生徒は、排他性欲求の高い生徒よりも自集団適応感が低い（仮説3）と考えられる。これまでの知見どおり、本人の期待する仲間集団のあり方と、所属している集団のあり方が一致しないため、ストレスが生じ、不適応感を覚えると評価するであろう。

本研究では、上述したように、仲間集団やその行動に対する認知も測定する。これらの項目は大きく、仲間集団の雰囲気に関する項目、仲間集団内でのいじめに関する項目、仲間集団内の地位に関する項目、仲間集団内での意見表明に関する項目に分けられる。排他性規範の高い集団は、低い集団より同調行動や第三者の排除などの同一行動をとろうとするため、同一行動をとらないメンバーが出てきた場合、逸脱したメンバーに対する仲間はずれや無視、暴力といった制裁としてのいじめが起こりやすい（仮説4）と考えられる。また、いじめとは、森田・清水（1994）などの定義から、いじめる者といじめられる者との間に地位の差が生まれ、後者は前者に対して立ち向かうことができない状況を刺すと考えられる。従って、排他性規範の高い集団は、低い集団より、強い権力をもったリーダーがおり（仮説5）、反対意見を言えない雰囲気がある（仮説6）と考えられる。

## 【方法】

### 調査対象者

中学生 1、2 年生 400 名のうち、全てに欠損値のなかった 363 名を分析に用いた。内訳は男子 178 名、女子 185 名であった。

### 実験計画

排他性欲求（高・低）×排他性規範（高・低）によって 4 つのシナリオを作成し、性別を要因に加えた 3 要因計画（いずれも被験者間要因）で実施した。

### シナリオ

三島（2004）の排他性尺度、有倉・乾（2007）で用いた排他性規範尺度をもとに作成した。冒頭に、「以下の文章は、中学生の友人グループについてです。自分と同性のグループを想定してください。あなたが男子なら男子グループを、女子なら女子グループを想定してください。」というメッセージを入れて、以下に挙げる文章を囲みで入れ、読ませる形式を取った。なお、データ入力に際して、条件別入力をしやすくするために、排他性規範高—排他性欲求高条件では A さんを、排他性規範高—排他性欲求低条件では B さんを、排他性規範低—排他性欲求高条件では C さんを、排他性規範低—排他性欲求低条件では D さんを、登場人物とした。

### 排他性規範高群の操作

A さんは、授業時間以外のほとんどの時間を決まったメンバーのグループで過ごしています。A さんのグループはメンバーが決まっており、新しい仲間を受け入れようとしません。また、グループの中だけでの決まりごとや言葉、秘密があります。グループ以外の人とは、あまり関わりがないため、グループ以外の人と遊べない雰囲気があります。だから、グループで遊んでいるときにグループ外の人がいるとしらけた雰囲気になってしまいます。

### 排他性欲求高群の操作

A さん自身も同じグループの友達、他のグループの子と楽しそうに遊んだり、話をしていたりするといやな気分になります。なぜなら、大切な友達を他の子にとられそうで心配になるからです。また、グループで行う学習、遠足や修学旅行は仲良しの友達だけで一つのグループをつくりたいと思っています。なぜなら、仲良しの友達だけで固まって過ごす方が仲間ではない子たちと過ごすよりも楽しいからです。だから、登下校の時もトイレに行くときなども仲良しの友達と一緒にいいと思っています。A さんは、自分の気持ちの中で、自分の仲良しの友達とそうでない子をしっかり分けています。

### 従属変数

学級内の友人関係への適応感（以下、学級適応感）6 項目（例 このクラスの人と顔を合わせるのを楽しみにしている、このクラスが気に入っている）、自集団適応感 6 項目（例 自分のグループの人と顔を合わせるのを楽しみにしている、自分のグループが気に入っている）、生起感情 6 項目（例 イライラする、さびしい、不安である）、集団内地位やいじめなどに対する認知 13 項目（例 このグループでは、いじめが起こりやすいだろう、このグループには数名（1、2 名）の強い権力をもったリーダーがいるだろう）、シナリオ操作（排他性欲求、排他性規範）の有効性を評価するチェック項目各 3 項目、場面の想像しやすさ 1 項目、ひとりぼっち回避規範尺

度(大嶽, 2004) 6項目から構成した。いずれも5件法であった。最後に調査を実施して感じたことを自由回答で求めた。

### 手続き

調査対象者は、ランダムに配布された4種類の冊子のうちの1つをとり、その中に書かれているシナリオを読んで回答してもらった。回答に際しては、学級適応感、自集団適応感、生起感情については登場人物の立場に立って回答を求め、いじめなどの認知については、客観的な立場に立って回答するよう求めた。なお、調査に際しては、各学級の担任に依頼し、実施してもらった。

## 【結果】

### 実験操作の有効性

シナリオで用いた排他性規範及び排他性欲求の操作が有効であったかどうかを検討するために、操作チェック項目各3項目をそれぞれ加算し、排他性規範(高・低)×排他性欲求(高・低)×性(男・女)の3要因分散分析を行った。

まず、排他性規範に関する操作チェック項目であるが、排他性規範の主効果が有意であり( $F(1,355)=823.62, p<.001$ )、排他性規範高群が規範低群より排他性規範を高く評価していた。しかし、同項目に関して、排他性欲求の主効果( $F(1,355)=30.52, p<.001$ )および排他性規範×排他性欲求の一次交互作用( $F(1,355)=4.57, p<.05$ )、排他性規範×性の一次交互作用( $F(1,355)=27.02, p<.001$ )が有意であり、十分な実験操作ができたとは言いがたい。

次に、排他性欲求に関する操作チェック項目であるが、排他性欲求の主効果が有意であり( $F(1,355)=803.72, p<.001$ )、排他性欲求高群が欲求低群より排他性欲求を高く評価していた。しかし、こちらも同項目に関して、排他性欲求×性の一次交互作用が有意であった。

いずれの項目においても、構成概念としては独立していても、実験操作の独立性を十分に保証できないという問題が明らかになった。しかし、それぞれの実験操作によって生じた分散比が最も大きかったことから、ある程度実験操作が有効であったと見なし、以下の分析を行うこととした。

また、想像のしやすさについて、評価してもらったところ、性のみ主効果が有意であり、女性( $M=4.14$ )の方が男性( $M=3.94$ )より想起しやすいと評価していた。

### 学級適応感

学級適応感については、 $\alpha=.90$ であり、十分に内的整合性は高いと判断し、加算得点について、排他性規範×排他性欲求×性の3要因分散分析を行った。その結果、排他性規範の主効果が有意であり( $F(1,355)=72.20, p<.001$ )、排他性高群( $M=3.26$ )が低群( $M=3.84$ )より学級適応感を低く評価しており、仮説1を支持していた。また、排他性欲求の主効果が有意であり( $F(1,355)=265.83, p<.001$ )、排他性高群( $M=3.02$ )が低群( $M=4.11$ )より学級適応感を低く評価しており、仮説2を支持していた。さらに、性の主効果が有意であり( $F(1,355)=4.23, p<.05$ )、

男子 ( $M=3.62$ ) の方が女子 ( $M=3.48$ ) より学級適応感を高く評価していた。

表1 各尺度の平均と標準偏差

| 排他性規範<br>排他性欲求<br>性別 | H群                  |                     |                     |                     | L群                  |                     |                     |                     |
|----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
|                      | H群                  |                     | L群                  |                     | H群                  |                     | L群                  |                     |
|                      | 男子<br><i>n</i> = 44 | 女子<br><i>n</i> = 49 | 男子<br><i>n</i> = 39 | 女子<br><i>n</i> = 50 | 男子<br><i>n</i> = 51 | 女子<br><i>n</i> = 43 | 男子<br><i>n</i> = 44 | 女子<br><i>n</i> = 43 |
| 学級適応感                | 2.90(0.67)          | 2.58(0.63)          | 3.88(0.68)          | 3.76(0.52)          | 3.35(0.71)          | 3.24(0.64)          | 4.42(0.58)          | 4.42(0.64)          |
| 自集団適応感               | 4.19(0.52)          | 4.20(0.57)          | 3.82(0.63)          | 3.65(0.65)          | 4.05(0.60)          | 4.12(0.54)          | 4.21(0.49)          | 4.32(0.54)          |
| 不快感情                 | 2.62(0.80)          | 2.76(0.79)          | 2.41(0.75)          | 2.49(0.82)          | 3.20(0.84)          | 3.47(0.78)          | 1.86(0.64)          | 1.62(0.63)          |
| 因子1                  | 3.42(0.66)          | 3.80(0.65)          | 3.54(0.85)          | 3.73(0.77)          | 3.27(0.81)          | 3.27(0.79)          | 3.13(0.73)          | 2.70(0.86)          |
| 因子2                  | 3.46(0.82)          | 3.83(0.87)          | 3.27(0.84)          | 3.61(0.97)          | 2.73(0.90)          | 2.57(0.97)          | 2.06(0.69)          | 2.04(0.78)          |
| 因子3                  | 3.00(1.02)          | 2.60(0.98)          | 2.82(0.94)          | 2.69(1.07)          | 3.02(1.01)          | 2.95(0.91)          | 3.34(0.97)          | 3.21(1.00)          |

Note. *n* は人数 ( ) 内は標準偏差である。

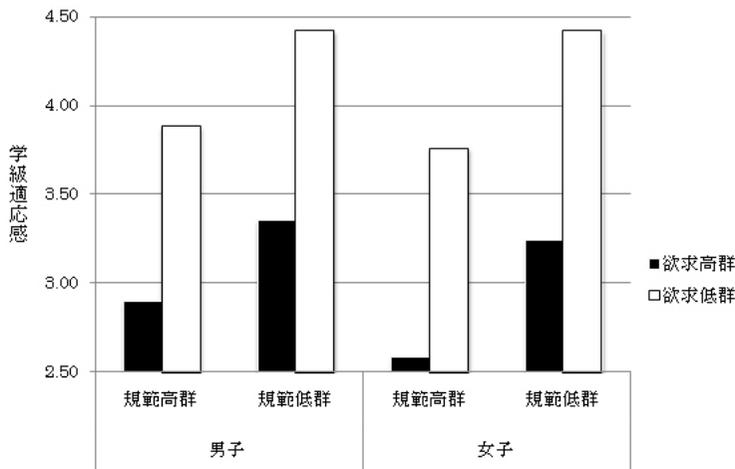


図1 排他性が学級適応感に及ぼす影響

### 自集団適応感

自身の所属する集団への適応感については、 $\alpha=.69$ であったが、ある程度内的整合性は高いと判断し、加算得点について、排他性規範×排他性欲求×性の3要因分散分析を行った。その結果、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1,355)=27.18, p<.001$ ) ことから、下位検定を実施したところ、排他性規範高群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求低群 ( $M=3.74$ ) よりも高群 ( $M=4.19$ ) の方が、自集団適応感が低かった。また、排他性規範低群においても、排他性欲求の単純主効果が有意であり、こちらは逆に、欲求高群 ( $M=4.08$ ) の方が低群 ( $M=4.26$ ) よりも、自集団適応感が低かった。この結果は、仮説3を支持しており、

排他性規範の高い集団状況において、排他性欲求の低い生徒は、その集団で不適応感を覚えていることがわかる。

なお、排他性規範 ( $F(1,355)=11.75, p<.001$ ) 及び排他性欲求の主効果 ( $F(1,355)=5.24, p<.05$ ) も有意であった。

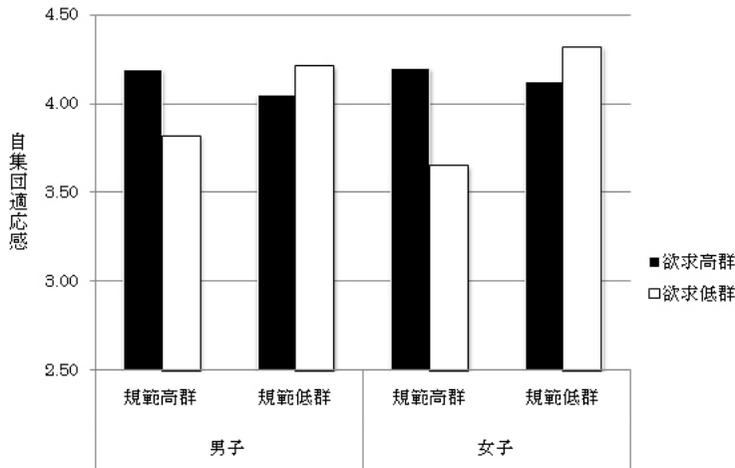


図2 排他性が自集団適応感に及ぼす影響

### 不快感情

イライラする、不安であるなど不快感情については、 $\alpha=.89$ であり、十分に内的整合性は高いと判断し、加算得点について、排他性規範×排他性欲求×性の3要因分散分析を行った。その結果、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1,355)=69.21, p<.001$ ) ことから、下位検定を実施したところ、排他性規範高群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求低群 ( $M=2.45$ ) よりも高群 ( $M=2.69$ ) の方が、不快感情が強かった。また、排他性規範低群においても、排他性欲求の単純主効果が有意であり、こちらは逆に、欲求高群 ( $M=3.33$ ) の方が低群 ( $M=1.74$ ) よりも、不快感情が強かった。全体的には、上記の自集団適応感と同様の結果になっているが、自集団適応感では、規範高-欲求低条件が最も不適応感が高かったが、不快感情では、排他性規範低-欲求高が最も不快感情が高かった。

なお、本分析においては、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1,355)=127.53, p<.001$ )、分散比の大きさから不快感情に及ぼす影響は大きいと推測される。

### 集団内地位やいじめなどに対する認知

本研究では、シナリオ文を読ませ、その状況をどのようにとらえるのかを検討した。評価項目をまとめる目的で因子分析を行い、3因子を抽出した (抽出後の分散説明率 50.33%)。第1因子は、いじめ及び集団内地位に関する項目、第2因子は、集団のつきあいやすさに関する項目、第

3 因子は集団内での意見表明のしやすさに関する項目がそれぞれまとまった。なお、項目 8 の「このグループでは、リーダー的な存在が何度も変わるだろう」はいずれの因子にも高く負荷しなかったため、分析から除外した。

続いて、因子ごとに加算得点を算出し、排他性規範×排他性欲求×性の 3 要因分散分析を行った。その結果、第 1 因子では、排他性規範の主効果が有意であり ( $F(1,355)=42.16, p<.001$ )、規範高群 ( $M=3.63$ ) の方が規範低群 ( $M=3.10$ ) より得点が高かった。また、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1,355)=5.25, p<.05$ )。下位検定の結果、排他性規範低群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求低群 ( $M=2.92$ ) の方が高群 ( $M=3.27$ ) より得点が低かった。これらの結果は、仮説 4、5 を支持しており、排他性規範が高い集団は、低い集団より、集団内に地位の差が生まれ、かついじめが起りやすく、いじめが起こるといじめめる側への同調が起りやすいことが示唆される。また、排他性欲求の高さは、排他性規範の高さほどのインパクトはないものの、いじめの起りやすさや集団内地位の差などの認知に少なからず影響を与えているものと考えられる。

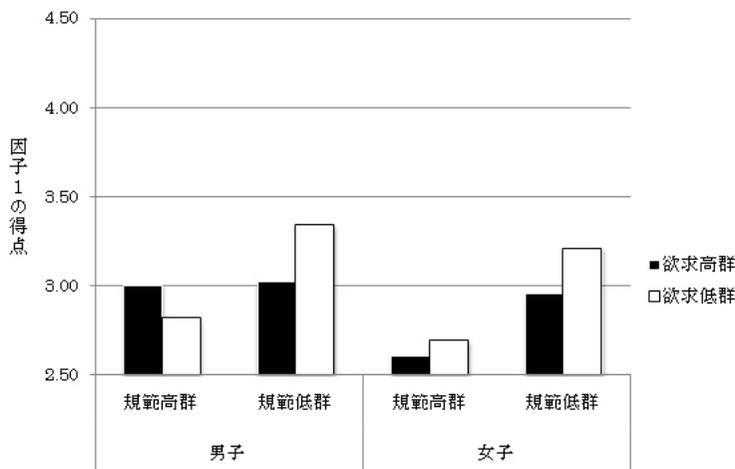


図 3 排他性がいじめ及び集団内地位の評価（因子 1）に及ぼす影響

第 2 因子では、排他性規範 ( $F(1,355)=168.49, p<.001$ )、排他性欲求 ( $F(1,355)=19.06, p<.001$ ) の主効果および排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1,355)=4.68, p<.05$ )。一次交互作用については下位検定の結果、排他性規範低群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求低群 ( $M=2.05$ ) の方が高群 ( $M=2.65$ ) より得点が低かった。第 2 因子も、第 1 因子同様の傾向が窺われ、排他性規範の高さが集団の付き合いにくさに強いインパクトを与えていることが示唆されよう。加えて、排他性規範×性の一次交互作用が有意であり ( $F(1,355)=5.79, p<.05$ )、排他性規範高群において、男子 ( $M=3.36$ ) より女子 ( $M=3.72$ ) の方が集団内のメンバー

と付き合いにくいと考えていた。

第3因子では、排他性規範の主効果のみが有意であり ( $F(1,355)=11.12, p<.001$ )、低群 ( $M=3.13$ )の方が高群 ( $M=2.77$ )より意見表明しやすいと評価していた。排他性規範の高い集団では、自分の意見を言いにくい雰囲気があり、この結果は、仮説6を支持していた。

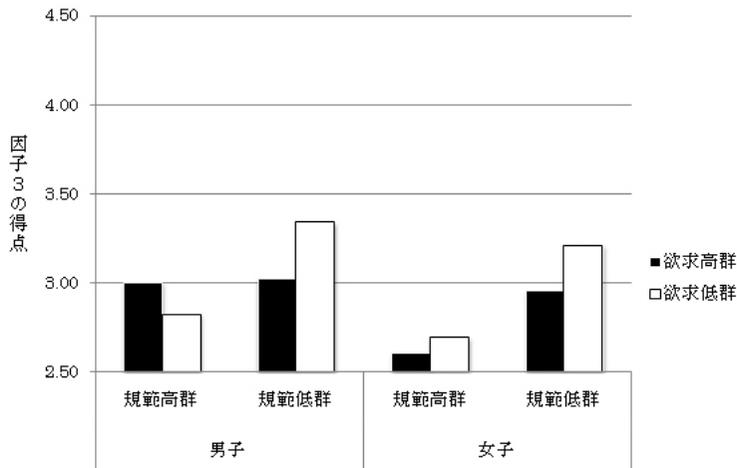


図4 排他性が意見表明のしやすさの評価(因子3)に及ぼす影響

### 【考察】

#### 本研究で得られた知見について

本研究は、架空場面を用いたシナリオ実験を行い、排他性規範及び排他性欲求が、学級や自身の所属する集団への適応感、いじめや集団内地位などに関する評価に及ぼす影響を検討することを用いた。その際、実際の仲間集団に関する調査から得られた知見(有倉・乾, 2007; 有倉, 2011)と同様の結果が見られるかどうかを確認することが主な目的であった。

その結果、学級適応感や自集団適応感については、有倉・乾(2007)や有倉(2011)と同様の結果が得られ、排他性規範や排他性欲求の高さは、学級適応感を低めていること(仮説1, 2)、排他性規範の高い仲間集団に所属している場合、排他性欲求の低い生徒は、排他性欲求の高い生徒よりも自集団適応感が低いこと(仮説3)が明らかとなった。これらの知見は、異なるアプローチから得られたものであり、その点で意義のある結果と言えよう。しかし、実験操作において、排他性規範と排他性欲求の独立性を保証できなかったことは、この研究知見に制約を与えるものであり、今後、構成概念を質問項目に反映させていく工夫を凝らしていく必要がある。その際、仲間集団における排他性規範の高さは、少なからず、その集団内のメンバー全員、あるいは一部のメンバーの排他性欲求の高さを反映しているものと考えられるため、そうした点を考慮した尺度化が求められよう。

本研究では、適応感を理解する一助として、不快感情の評価も行った。その結果を見る限り、排他性規範と排他性欲求のズレが不快感情を高めていた。つまり、排他性規範の高い仲間集団に所属している排他性欲求の低い生徒や、排他性規範の低い仲間集団に所属している排他性欲求の高い生徒は、不快感情が高いと評価されていた。この結果からは、仲間集団外の生徒との関わりを持っていない集団において、同じ集団のメンバーだけで関わりたい生徒の不快感情が高いという知見が新たに引き出されたと言えよう。ただし、架空のシナリオを用いた実験から引き出された知見であるため、今後、実際の仲間集団を扱った調査によって検討される必要がある。

加えて、本研究では、集団内地位やいじめに対する認知を測定した。その結果は、仮説4～6を支持するものであった。まず、排他性規範の高い集団は、低い集団より同調行動や第三者の排除などの同一行動をとろうとするため、同一行動をとらないメンバーが出てきた場合、逸脱したメンバーに対する仲間はずれや無視、暴力といった制裁としてのいじめが起りやすく（仮説4）、強い権力をもったリーダーがいる（仮説5）という仮説を立て、支持された。これらの仮説については、因子分析の結果、同一因子に高く負荷したので、まとめて検討したが、単項目での分析でも同様の結果であった。また、排他性規範の高い集団は、低い集団より反対意見を言えない雰囲気がある（仮説6）という仮説も、同様に支持された。Janis (1972) は、集団思考 (groupthink) が見られる集団の特徴として、集団凝集性が高い、反対意見を言えない、指示的なリーダーがいるなどを指摘したが、本研究でいうところの排他性規範の高い仲間集団も同様の特徴をもっていると言えよう。また、いじめが起りやすく、いじめが起こった場合にいじめる側に同調するといった行動がみられるだろうという評価は、ある意味で排他性規範の高い集団における集団思考の問題とみることも可能であろう。その点では、排他的な仲間集団の問題は、まさにグループダイナミクスの問題であり、その理解と解決にあっては先行研究の知見が活かされるかもしれない。

### 排他性における性差

保坂 (1996) や黒沢他 (2003) は、男子よりも女子の方がチャムグループをつくりやすいことを指摘している。チャムグループの特徴は、本研究で検討した排他性規範の高い仲間集団のそれと類似していることが多く、性差を検討する意義があると考えたため、今回のシナリオを用いた実験において性の要因を含めた。その結果、排他性規範や排他性欲求と性の交互作用が見られたものは多いとは言えず、集団の付き合いにくさにおいて、排他性規範×性の一次交互作用が見られたのみであった。有倉 (2011) の知見も踏まえると、性は、排他性のいずれかの要因と交互作用を生み出す要因ではなく、排他性規範や排他性欲求を高める効果をもつ要因であると考えられる。つまり、排他性規範や排他性欲求はいずれも性差がみられ、女子の方が男子よりも高いことがわかっており、本研究においても、女子の方が男子よりシナリオの想像しやすさが高かったことから明らかであろう。このことは、排他性の両指標が学級適応感や自集団適応感、集団内地位やいじめなどの状況認知に及ぼす影響プロセスに顕著な性差が見られないことを意味する。た

だし、本研究のサンプルは中学生のみであるため、ピアグループを構成し始める高校生についても同様の示唆が得られるか更なる検討が必要であろう。

### 本研究の問題点と今後の課題

すでに上述したが、本研究においては、実験操作の独立性を十分に保証できなかったことが大きな問題点として挙げられる。このことは、構成概念を測定していく上での妥当性の問題でもあろう。排他性規範と排他性欲求が構成概念上独立していることを示しても、実験操作や尺度化においてその独立性が保たれていなければ、十分な仮説検証はできないと考えられる。今後は、両概念を媒介すると考えられる統制変数を投入して検討していく必要がある。考えられる統制変数としては、集団内地位の高さを上げることができよう。なぜならば、集団内地位が高いメンバーがいる集団の場合、そのメンバーの排他性欲求が高ければ、集団に及ぼす影響力が強いため、排他性規範は高くなると考えられるからである。

このほか、今後の課題としては、これまでも指摘されてきたが、親密な仲間集団がどのような特徴をもつと排他的になるのかについて検討を行う必要がある。仲間集団が親密であることは、その後の社会性や社会的スキルの発達において重要な働きをもっている。その点で思春期以降の発達において重要な意義をもつ。しかし一方で、仲間集団が排他的であることは、本研究でも明らかになったように反社会的あるいは非社会的な行動や集団内外のいじめを助長するといった影響をもつ。この課題を解明する手がかりの一つとしては、仲間集団がどのような動機で結びついたのかを明らかにすることであろう (e.g., 石田・小島, 2009)。それは学級集団の問題かもしれないし、個人のアイデンティティの不確かさからくる問題かもしれない。これらの課題を解明することで、学校内外で起こるいじめの問題解決の一助となれば幸いである。

### 【引用文献】

- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 保坂 亨 (1996). 子どもの仲間関係が育む親密さー仲間関係における親密さといじめー 現代のエスプリ, **353**, 43-51.
- 石田靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連～仲間集団の形成・所属動機という観点から～ 愛知教育大学研究報告, **58** (教育科学編), 107-113.
- Janis, I. L. (1982). *Groupthink*, (2<sup>nd</sup> ed.). Houghton Mifflin.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2006). 個人ー集団間の役割期待遂行度が仲間集団関係満足度に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **45**, 111-121.
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫 (2003). 仲間関係発達尺度の開発ーギャング、チャム、ピアグループの概念にそってー 目白大学人間社会学部紀要, **3**, 21-33.
- 三島浩路 (2004). 小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究 生徒指導研究, **15**, 51-56.
- 三島浩路 (2008). 仲間集団指向性尺度の作成ー小学校高学年用ー カウンセリング研究, **41**, 129-135.
- 森田洋司・清水賢二 (1994). 新訂版いじめー教室の病 金子書房
- 大嶽さと子 (2004). 「ひとりぼっち回避規範」に影響を及ぼす諸要因の検討ー個人的要因の観点からー 日本グループダイナミクス学会第51回大会発表論文集 pp.180-181.

- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編著) 親密な対人関係の科学 誠信書房, Pp.89-116.
- 有倉巴幸 (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, **21**, 161-172.
- 有倉巴幸・乾 丈太 (2007). 児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 (教育科学編), **58**, 101-107.